

幼稚園の健康保育

について



平井信義

この一〇年をふりかえって、幼稚園での健康教育や健康管理がどのように伸展したかを考えてみますと、卒直にいつて、あまりふるわなかつたと言えるのではないのでしょうか。もちろん、この面で非常に努力されてきた幼稚園もあります。けれども、多くの幼稚園ではかなりなおおざりにされている分野です。また、研究会には決して健康保育の部会が立てられません。しかし、二、三の方々の熱心なご発言はみられても、多くの方々のお顔には、なかなかついていけないという表情が見受けられるのです。

そこで、何故そのようにふるわなかつたか、今後にどのようなしたらよいかを考えてみたいと思います。

(1) 健康保育は何故おろそかにされているのだろうか

ふた言目には、子どもの健康は大切だと言われ、健康を守るために努力しなければならぬと叫ばれながら、目に見えた伸展がなかつたのは、どのような理由からでしょうか。

(4) 衛生に関する知識の不足や理解の低さ

これは、我が国一般について言えることですけれども、特に保育者に対してそれを言いたいのです。

もちろん、責任の多くが、これまでの医師の在り方にあると思います。簡単に言えば医師がその特権を振り回して、一般の衛生知識の向上に努力しなかつたのです。ですから、少しでも医学的なこととなると、医者まかせ——という気持が根強く植えられてしまいました。病気の診断とか処方については専門家の力をかりなければなりません、そうした病気から自己を守る方法とか、他人に感染さ

せないための努力——すなわち公衆衛生について、少しも啓蒙的役割を果してこなかったのです。本当は、病気にかけないためにいろいろな医学的知識を教え、その方法を身につけさせるということ、すなわち予防医学が大切であるのに、この方面は長い間ないがしろにされてきたのです。最近でこそ、この方面の努力が活発になったとはいへ、現在のおとなの方々には、それが及んでいないのです。

(四) 保育科のカリキュラムの欠陥 こうしたことが、実は、保育科のカリキュラムにもよく現れています。健康保育のためには極く僅かの時間しか当てられていません。しかもそこに招かれる医師は、公衆衛生や予防医学よりも、病気についての話をして時間を埋めているというのが、現状ではないでしょうか。幼稚園の実態をさえない医師も少なくないのです。これでは、園の衛生施設を改良したり、予防処置に注意をゆきわたらせるような保育者を作ることは、不可能に近いことと思います。ですから、もっともって保育者によって作られてもよい文化財、たとえば衛生のための紙芝居やお話などが、一向に生れてこないのです。その工夫をする気持にも乏しい現状ではないでしょうか。

(五) 園医の制度もおおざなり 園医といっても多くは名前ばかりで、年に一回の身体検査のときに聴診器を当てるということではないでしょうか。これでは、およそ園医の性格から遠ざかっていきます。園医というのは、健康管理のために必要な存在です。その建議

によって、衛生上の設備がじゅうぶんかどうかを、保育者とともに相談し合う立場が求められています。ところが、そのような園医は、まことに少ないのです。その原因は、園医に出す謝金がまことに少ないということもありますが、公衆衛生や予防医学の知識をもった医師がまことに少なく、したがって関心もうすく熱意に乏しいのです。ですから、保育者も、年に一回の健康診断の際に立ち会うことのほかは、何ら実地に当って教育されることがないのです。

このような不遇の中から立ち直って、何とかして公衆衛生・予防医学の知識を持ち、実地に応用して、健康保育の実績をあげることが何より必要です。それを通じて子どもたちにもその家庭にも、健康を守ることの意識を高めたいのです。それが実を結ぶはずの次の世代に期待を持ちたいのです。

実は、健康保育の実があらがないのは、その効果が直ちに現れないことにも一つの原因があります。他の領域の保育ですと、その効果がかなり早く眼に見えてきます。ところが、衛生環境をととのえたり、健康保育に熱心になっても、直ちに弱い子どもを丈夫にしたり、或いは痩せている子どもを太らせたりすることはできないのです。ですから、非常に長い期間をじっと見守っていなければならぬのです。これでは、短慮の保育者が興味を示さないのも無理もない一面を持っていると思います。しかし、それでよいのでしょうか。

殊に、現在園長である方々が、健康保育に熱心でないことが致命的であり得ます。熱意のない園長は、以上に申し述べたような原因をすべて集約して持っているのではないかと思うことさえあるのです。そのために、保育者の中で熱意をもっている方々が、どうにもならず苦しんでいる姿を、ときどき見受けることがあります。この点での隘路を、どのように切り開いたらよいでしょうか。

(2) 子どもの衛生的習慣がなかなか身につかないのは何故だろうか

衛生上の習慣、たとえば手洗いにせよがいかにせよ、立小便をやることにせよ、それらがなかなか実行されないのはどういうわけでしょうか。きつく言えば、その時は実行しても、なかなか習慣にならないのです。

(1) 家庭におけるしつけの不備 幼稚園において、いかに熱心にしつけをしても、家庭において協力的な態度がないと、なかなか習慣とはなりにくいものです。家庭におけるそうした不備は、親が無関心であることもあり、或いは衛生上の設備をするためのお金がないという場合もあります。テレビなどはいち早く買うのに、台所とか便所とかは、一向に積りまま——という偏った生活文化の在り方が、大きい問題だと思います。とにかく、家庭の協力をいかに得るかということ、家庭教育をいかにするかということが、幼稚園の大きな営みとなりましょう。時折、家庭教育にまで手を出すべきで

ないという説をききますが、それは幼児の精神的発達を知らない方の言い分です。幼児は、非常によく周囲からの影響を受ける存在です。しかも、両親からの影響は大きいものです。両親の生活態度やものの考え方が変らなくては、子どもはよく伸びていきません。いろいろな点で歪みができてしまいます。そこで、家庭教育をすすめるために、両親教育をさかんにしていただきたいのです。その中で、衛生的習慣の形成を期待し、更には生活文化の正しい考え方に ついて、考えてもらうようにしてはどうでしょうか。それにつけても、PTAが幼稚園の世話をやくという外面的活動でなく、いっしょに勉強し合うという内容的な活動をするよう期待したいのです。

(2) 保育者に欠如しているしつけの重点 しつけを、カリキュラムに従って満遍なく行なうというのは、迫力がありません。何が重要か、それについて根を下ろして考えることが、しつけを迫力のあるものにすると思います。例えば、幼児期または三〜五歳の年齢における、三大死亡原因について論ぜよ——という問題を出したら、何とお答えになるでしょうか。まず、子どもを生命の危険から守らなければなりませんし、その態勢をきちんと整えておく必要があります。その第一が不慮の事故であるならば、事故の原因にたいする問題をよく考えてみる必要もあるのです。園内の怪我もそれに関係してくるかもしれません。怪我をしやすい場所はないか。古い考え方ですと、「そうした場所では注意して遊ぶのですよ」という

訓戒を与える方式が生じますが、幼児のしつけに果してそれでよいか。その他の方法を用いるとしたら、どのようにするか。また、怪我の多い子どもはないか、その原因は何か——などなど、たくさん問題があります。そのほか、腸炎や赤痢などで死亡する子どもが、他の文明国に見られないほど多いとしたら、園としてどのような対策を立てたらよいか。殊に、おなかの病気を予防する策として、一つには手洗いの励行などが考えられますし、どのよう洗手を洗うことが有効な方法かを考えてみなくてはならないでしょう。その他、買い喰い・遊び喰いの防止にどうしたらよいか、これは家庭との協力がどうしても必要となる面でしょう。また、各種の伝染病について、その予防の対策を根深く考えていくことのできる保育者であってほしい。そうした熱意が欲しいのです。

(4) しつけの上での混乱 保育者が配慮すべき衛生上の問題と、子どもにしつけるべき事柄とを、しばしば混同していることを指摘したかったのです。これは、前の指導要録にも見られることです。そのほかのカリキュラムと呼ばれているものを見ますと、ずい分高次のことを子どもに要求していることがあるのに驚きます。幼児期の子どもに、いったい、どれほどの理解力があるのか、殊に衛生のしつけということは、直ちに目に見えた結果のないもの、バイキンなどといっても全く何が何やらわからない、そのようなことを案外見落して、子どもにあれこれ説明したりしつけたりしているので

はないでしょうか。ですから、いつまでたっても、しつけが軌道にのらないというのが現状ではないでしょうか。

(5) 発育についての誤った理解 子どもの身長が少なかったり、体重が少なかったりすると、すぐに「ダメネ」という気持になる保育者が多いのではないのでしょうか。量さえ大きければそれで、「良い」とする考え方は、これまで頑固につづいていました。しかし、果してそれでよいか。チビでも丈夫で活発な子どもがいます。デブでも弱いからだの子どもがいます。いま殊更にチビとかデブということばを用いましたが、実は、一日も早くこうした劣等性を含んでいることばを、捨ててしまいたいからであります。小さくとも大きくとも、その養育に欠陥がなければ、それはその子どもの個性といってもよいのであります。個性を重んずるようなしつけは、この点でも強調されるべきです。しかし、残念ながら、個性についてはまだじゅうぶん研究されていないのですし、幼児の生理的機能についての研究も薄弱です。保育者と研究者とが手を合わせて開拓していかなければならない分野であると思います。

以上のほか、まだまだ考えればたくさん問題が残っています。何から手をつけてよいかと思うほどですが、これから大いに努力し合って健康保育の実を挙げたいと思っています。

××

××

××